

1300年前の景観保存 — 県職員の功績 —



文化議員連盟会員
渡辺 美穂

大伴旅人や山上憶良も写真とほぼ同じ風景を見ていたはず。この写真は、大宰府政庁跡から後ろに控えている四王寺山を写したものです。私たちが今この景色を見ることができるのは、多くの方のまさに命を懸けた思いがあったからです。昭和30年代、戦後の混乱から立ち直っ

てきた日本には、「文化財保存」という認識が広がっていました。同時に高度経済成長期に入り、「開発」も盛んにおこなわれるようになり、大宰府も例外ではありませんでした。福岡市の通勤圏で地価が値上がりし、それまで農業に従事していた地権者の多くが土地を売ったり、不動産物件を持つことで生活を豊かにする方法を取り始めていました。当然ながら緑豊かな四王寺麓の大宰府政庁跡周辺においても開

発を進める動きが加速していました。

しかし、その大きな波に挑み大宰府の発掘と保存を実現した人がいました。山形県出身で文化庁の技官を経て福岡県職員となった藤井功さんです。

文化財を保護するために、国が史跡指定するということは、地権者が私有地を自由に使えることを意味しま

す。当時大宰府では、国は私権を制限しているとして、町議会を先頭に地元住民たちの間で大反対運動が起きていました。藤井さんが大宰府に赴任してこられたのはまさにその運動が過熱していた昭和43年でした。藤井さんは「反対」の看板が立ち並ぶ史跡で発掘を行

いながら、夕方になると一升瓶を持って発掘を手伝ってくださる方、あるいは地権者の方々の家を訪問し政庁跡は地元の誇りになると、酒を酌み交わしながら何度も何度も繰り返し語られたそうです。更に発掘の中でそれまでの歴史解釈とは違った事実が掘り出され、大宰府史研究にも大きな影響を与えるなど、粘り強い藤井さんの言動が次第に住民に受け入れられるようになり、ようやく国の計画通りの史跡指定が実現しました。

しかし藤井さんは、この国の史跡指定決定後、福岡県職員として九州国立博物館の大宰府誘致に乗り出されたばかりの昭和60年、まだ53歳という若さで急逝されました。日記に「疲レル、キョウ酒やりタクナシ、永遠ニヤスミナシ」と書かれていました。大宰府の史跡を守るために命を縮められたと誰もが思ったそうです。

今私たちが目にすることができるこの景色は、藤井さん

をはじめとする先人たちの思いの結晶であり、同時に景観を守ることは容易なことではないということを我々に語っています。



当時の新聞記事の数々

政庁跡に立てられた看板



平成30年12月3日、議会初日、当日の朝を迎え、私は、緊張と不安な気持ちで登壇しました。

今日は、九州交響楽団を迎え、史上初の議場コンサートが開催される。



文化議員連盟会長
新開 昌彦

文化議員連

発行 福岡県文化議員連盟
所在地 福岡市博多区
東公園7番7号
福岡県議会事務局内
責任者 新開 昌彦

最大の不安は、本会議場で弦楽四重奏は、初の試みであるため、果たして音の響きが傍聴席まで届くのだろうかということでした。

祈るような思いで、演奏者の4人がリハーサルをしている本会議場に足を踏み入れた途端、その不安は、感動に変わりました。

第1ヴァイオリンの扇谷泰朋ソロコンサートマスターも同じ不安をお持ちだったようですが、「ひよつとするとアクロスのシンフォニーホールにも劣らない音の響きが生まれるかもしれない」との言葉に不安が期待となつて大きく膨らみました。

九州交響楽団は、昭和28年から65年の長きにわたり、九州の常設オーケストラとして活動を継続されています。

文化議員連盟は、来年30周年の節目を迎えます。私達は、是非とも九州交響楽団をお迎えして演奏を聴きたいと思い、昨年の12月8日、議会議場の第2会議室で弦楽五重奏コンサートを開き、大変感動しました。次は是非、本会議場で開催しようと準備を進めてきました。



井上順吾議長を始め、各会派の皆さんの賛同を得て、史上初の本会議場コンサートを開催することができました。心から感謝申し上げます。また、実現に向けて共に汗をかいて頂いた文化議員連の役員の皆様、議会事務局の皆様に重ねて感謝申し上げます。

当日の九州交響楽団の演奏者は、第1ヴァイオリンは、ソロコンサートマスターの扇谷泰朋さん、第2ヴァイオリンは、齋藤羽奈子さん、ヴィオラは、矢島千愛さん、チェロは、首席奏者の山本直輝さんという精鋭が揃いました。曲目は、モーツァルトの弦楽四重奏曲第17番変ロ長調「狩」より第一楽章。同じくセレナード第13番ト長調「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」の

二曲です。

水を打ったような議場で静かにコンサートが始まりました。奏でる音律は、時には強く、大きく、優しく議場を包み込み至福の時間を刻んでいきました。約30分間のコンサートは無事終了し、満場の皆さんのアンコールに応えて、モーツァルトのアヴェ・ヴェルム・コルプスを演奏して頂きました。傍聴席にお招きした小川洋知事からは「思いがけず議場で九響の演奏を聴くことができ、音の響きに感動し楽しむことができた」と感想を頂きました。

お越しいただいた県民の方からは、「傍聴席でもよく聞こえました。素晴らしい会場ですね。感動しました。贅沢な時間を過ごさせていただきました、感謝です。」とお褒めの言葉にやつてよかったと感謝の思いで一杯になりました。

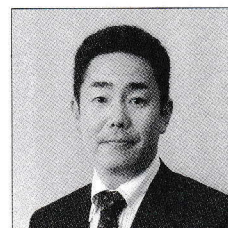
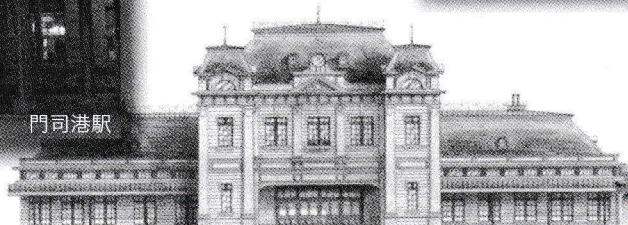
今期の活動はこれで最後です。皆様ありがとうございました。



大正ルネサンスを現代に伝える 貴重な建造物 門司港駅



門司港駅

文化議員連盟会員
川端 耕一

復原される門司港駅のイメージ

門司駅（現門司港駅）は、九州鉄道の起点駅として明治24（1891）年に開業しました。その駅舎は木造平屋の小さな建物でした。門司の発展に伴って、最初の駅舎が手狭になったことや老朽化が進んだため改築されることとなりました。

新駅舎は、旧駅から約300m西方の海岸沿いで、対岸の下関とを結ぶ連絡船の乗降に便利な現在地に場所を変え、大正3（1914）年1月に完成。

駅舎の本屋は木造2階建てで、ネオ・ルネサンス様式と呼ばれる左右対称の外観デザインが特徴であり、1988年に駅舎としては全国で初めて国の重要文化財に指定されました。駅構内には戦前から使用されている洗面所、手水鉢、上水道など様々な歴史的資産が存在し、現在は別用途に使用されていますが、「一・二等客待合室」・「チッキ（手荷物）取扱所」・「貴賓室」・「関門連絡船通路跡」等も残されています。特に関門連絡船通路跡には旧日本軍の命令で設置された渡航者用監視窓の跡も残って

おり、これは当駅が外来航路の寄港地だったため、戦時下の不審者を発見する格好の場所だったといわれています。

昭和17（1942）年、関門トンネルの開通に伴って、トンネル口にあたる大里駅が門司駅に、これまでの門司駅が門司港駅に改称され、本州と九州を連絡する鉄道輸送の流れから外れることになりました。しかし、その後も門司鉄道管理局や国鉄九州総局などは引き続き門司港駅のそばに置かれ、国鉄分割民営化後もJR九州は平成12年まで異例の福岡と北九州の2本社体制を維持し、門司港駅脇に北九州本社が引き続き置かれていました。

開業後100年近くが経過し、シロアリ被害や老朽化による腐食でゆがみや亀裂が生じていることが分かったため国・福岡県・北九州市・JR九州が話し合いを行い、2012年9月から本格的な保存修理工事を開始しました。

大正時代の創建当初の姿に復元され、外側は石張り風にモルタルを塗り、屋根には天然の石盤を葺きます。さらに途中の時代で失われてしまった屋根周りの飾りも復元されます。また門司港駅のシンボルにもなっている正面の大時計は実は後から取り付けたものですが、国内で5番目、九州では初めて取り付けた電気時計で、その歴史的価値を尊重し今回の復元では新調することになりました。ほかにも、正面向かって右側の庇と倉庫も後世に取り付けたものですが、関門連絡船の歴史保存の観点から残すことになりました。

した。

当初は2017年度末の完成を予定していましたが、今後も生きた文化財として活用していくことから、駅利用者の方々に安心して使って頂けるように耐震補強工事を実施し、今年2018年11月にコンコース、改札口供用が開始され来月3月にグランドオープンとなります。

明治の後半から横浜、神戸と並ぶ国際貿易港として栄えた門司港。

その流通を支えてきた歴史的建造物でもある門司港駅が105年前の姿に復元されます。

福岡県文化議員連盟 役員名簿

（平成30年12月20日現在）

会長 新開 昌彦（公明党）

副会長 今林 久（自民党県議団）

堤 かなめ（国民民主党・県政界議団）

神崎 聡（緑友会）

事務局長 松下 正治（公明党）

幹事 岳 康宏（自民党県議団）

野田 稔子（国民民主党・県政界議団）

田中 正勝（公明党）

梶島 徳博（緑友会）



石人山古墳家形石棺

九州最古の石棺系装飾古墳

せきじんさんこふん 「石人山古墳」

文化議員連盟幹事
野田 稔子

私の故郷「八女地域」は、耳納山地からのびてきている、「八女丘陵」と呼ばれる東西10kmにわたる狭長な丘陵があります。その丘陵には、約300基の古墳が存在していることから「八女古墳群」として国指定を受けています。

今回は、その「八女古墳群」のルーツともいえる八女郡広川町の南側にある「最も古い古墳」と考えられている九州の彫刻系装飾古墳「石人山古墳（広川町）」をご紹介します。読者の皆様方を浪漫に溢れる古代八女地域（五世紀）の旅へとご案内させていただきます。

「石人山古墳」は、八女丘陵の西端付近に位置し、その一部を利用し築造された前方後円墳（全長約110m）です。5世紀代の八女地方に突如として出現した、この古墳の被葬者は、初代の筑紫国造（筑紫君磐井の何代か前）とも考えられています。

「石人山古墳」の出土品や石製表飾及び装飾文様等を分析・解明する研究は、江戸時代1853（嘉永6）年に始まり、その当時の考古学的研究の先駆者、矢野一貞により、「石人山古墳」の略測絵図と家形石棺の前面がすでに露出している様子が「筑後将士軍談」の中で述べられています。

その後、1932（昭和7）年に武藤直治が墳丘を実測し、石棺が石室内にある可能性を述べ、1936（昭和11）年、鏡山猛・武藤直治が石棺上部の土砂を取り除き、石棺と石室の正確な実

測図の作成や石棺の棺蓋にある直弧文の浮き彫りについて報告しています。

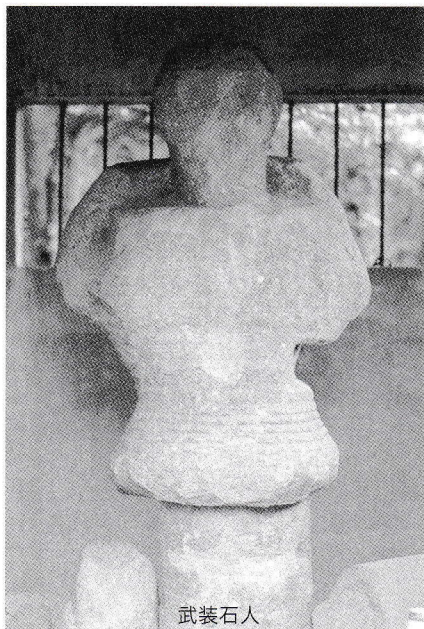
特徴的な装飾は浮き彫りで、妻入り横口式家形石棺の棺蓋と棺身に確認でき、一石で造られた寄棟屋根型の棺蓋外面（長さ2.7m、幅1.4×1.5m、高さ50cm）と厚さ16cmの4枚の板石で組み合わせた棺身前壁の入り口部左右壁面に確認されています。

加工しやすい阿蘇溶結凝灰岩製石材を用い、棺蓋長辺には上段の5区画内に重圏文、下段に5個の連接する直弧文が1区画内に立体的に浮き彫りされており、棒状縄掛突起のある前後短辺部にも、直弧文らしき浮き彫りが認められています。

直弧文・重圏文は被葬者に対して鎮魂的な意味を持つ図文と考えられており、石棺に先進的な文様をいちはやく採用した被葬者像の、中央勢力との繋がりも感じます。

このように、江戸時代から続く研究から「石人山古墳」が九州最古の「石棺系の装飾古墳」として、重要な位置を占めるということが解かります。

しかしながら、1936（昭和11）年以降、本格的な墳丘測量・範囲確認調査などは行われず、現在に至っており、解き明かすべき課題も多く、今後の研究に期待するところです。



武装石人

広川町大字一條字人形原1435番に位置する「石人山古墳」を守り続ける地元民による「ひろかわ古墳祭」は、毎年11月の第2日曜日に石人山・弘化谷古墳公園で開催されています。

是非1度、足をお運び頂き、5世紀前半に築造された九州の彫刻系装飾古墳を代表する「石人山古墳」を訪れ、古のロマンを感じてみませんか？

この古墳をお守りする阿蘇溶結凝灰岩製の武装石人1体が皆様の御訪問を心からお待ち致しております。

※直弧文↓直線と帯状の弧線の組み合わせ

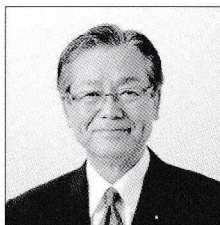
※重圏文↓2重の円文

直弧文・重圏文は、いずれも辟邪（中国の想像上の獣）や魂を表すものと考えられています。

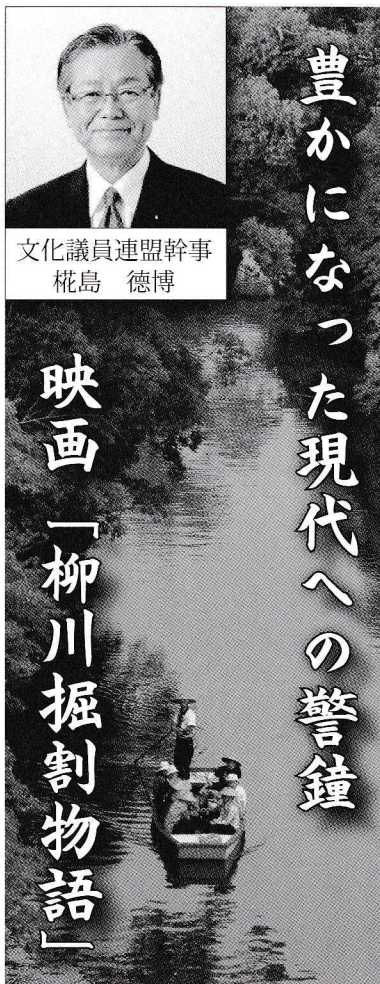
参考文献…「広川町史」
資料提供…「広川町郷土史研究会」



豊かになった現代への警鐘

文化議員連盟幹事
梶島 徳博

映画「柳川掘割物語」



映画「柳川掘割物語」は、「風の谷のナウシカ」で知られる高畑勲（監督）と宮崎駿（プロデューサー）両氏が手掛けたドキュメンタリーの長編映画（1987年公開）です。

高畑監督は、柳川を舞台にしたアニメの映画を制作するために取材で訪れ、掘割や水の専門家である広松傳さんに出会います。広松さんは、柳川の持つ独特の歴史的な水管理システムや荒廃した掘割を再生した時の奮闘談を熱く語りました。この話に甚く感激した高畑監督は、アニメではなくドキュメンタリー映画として、ありのままの柳川を描こうと当初の計画を大きく変更したそうです。

三年の歳月をかけ完成したこの作品は、行政と市民の協働で昔の掘割を取り戻した物語です。昔から私たちが大切にしてきた「お蔭様やお互い様」の心を思い起こさせてくれる感動の映画です。

ここで、印象に残ったいくつかの場面を紹介してみます。

に下るドンコ舟から眺める水辺の映像を背景に、加賀美幸子さんのナレーションで始まります。

「日本が貧しかったころ、どの村にも小川が流れていた。春の小川はさらさらと行き、岸にはスミレやレンゲの花。子どもは小鮒を釣り、夏の蛍を追って遊んだ。日本が貧しかったころ、どのまちにも掘割があった。水は必ずしも清くはなかったけれど、橋や水辺にたたずめば、水の流れは暮らしの重荷を軽くし、疲れを癒やしてくれた。人々は、付き合ひの中で、水を向けたり、水に流したり、水掛け論を繰り返した。我田に引水することもあれば、堰を切って水を溢れさせることもあった。日本が貧しかったころ、手の届くところに水辺があった。」

冒頭のこの詩は、作品全体を貫くモチーフで「本当の豊かさとは何なのか」と深く考えさせられるものがあり、物語に引き込まれていきます。序論は、弥生の時代から現代に至るまでの平野と掘割の成り立ち。水と闘っ

てきた歴史やそこに注がれた先人の気の遠くなるような苦勞とその知恵がアニメを交えて詳しく解説されています。本論では、水郷のまちとして知られる柳川も、決して水に恵まれた地域ではないことが描かれています。また、堀の水が飲料水であったことから、水辺には水神様を祀り、川と水をととても大事にしてきたことなど、素朴な柳川が映し出されています。

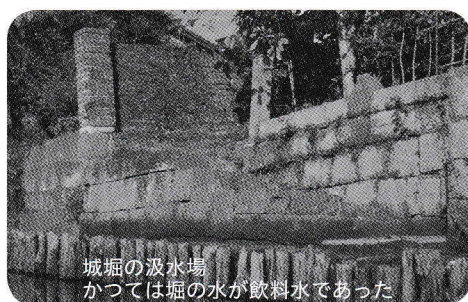
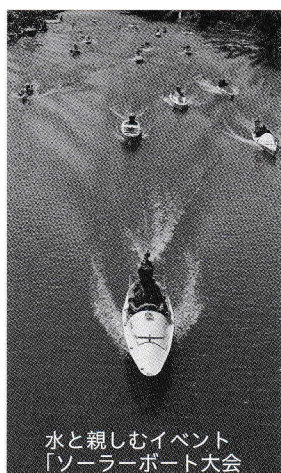
本論中盤、場面は昭和30年代に遡ります。戦後の高度成長期、水道の普及などで掘割の荒廃が進み、市はやむなく汚染された掘割の埋め立てを決定します。しかし、この計画に待ったをかけたのが、当時の市下水道係長広松傳さんです。彼は「この計画を進めれば掘割どころか柳川が沈没してしまう。」と掘割再生の必要性を市長に直訴。彼の必死の訴えと市長や議会の英断で再生への道が開かれます。その後、市職員自らが市民の中に飛び込み、地域の協力を得るための説得に奔走します。本論後半では、行政と市民の協働で、昔の掘割を取り戻すまでの必死な取り組みが描かれています。

最終章、祭りの場面のナレーションには「川との煩わしい付き合いは、連帯感なしにはあり得ない。苦勞も楽しみも共にすることで連帯は深まる」というくだりがありますが、ここには、高畑監督の強いメッセージを感じます。確かに昔は、祭りや堀清掃の時は、住民同士が一緒になって汗を流しました。この営みの中で引き継

がれてきたのが柳川の掘割です。

翻って、今日の社会に目を向けると、地域コミュニティは希薄になり、住民の連帯と自治意識は低下する一方です。その結果、福祉や教育に限らず「煩わしいこと」は何でも行政頼みとなり、公共サービスは肥大化しています。結局、そのつけは住民の重い負担になるという悪循環を招いているような気がしてなりません。

映画「柳川掘割物語」は、便利さと引き換えに大事なことをなおざりにしてきた現代社会に警鐘を鳴らすものであり「人と自然・住民と行政がどのように関わっていくべきなのか」を考えさせられる示唆に富む作品です。ぜひ一度ご鑑賞ください。

城堀の汲水場
かつては堀の水が飲料水であった水と親しむイベント
「ソーラーボート大会」

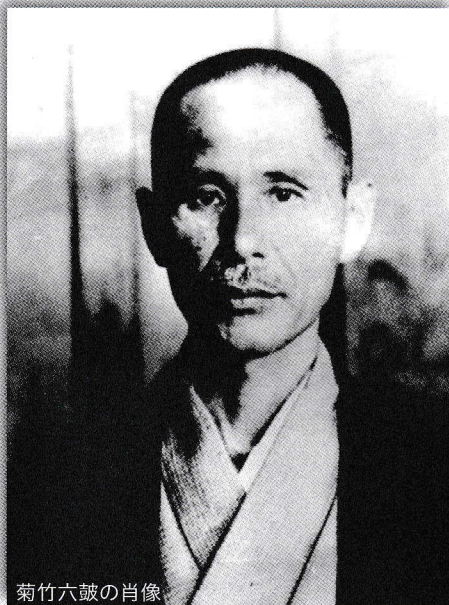


一九九九年、人権と民主主義を守るため報道の自由に貢献した「二十世紀の報道人百人」（世界新聞協会主催）として、福岡日日新聞（西日本新聞の前身）の菊竹六鼓（本名・淳^{すなお}）が大阪朝日新聞（朝日新聞社）の長谷川如是閑（本名・萬次郎）とともに、日本から2人が選ばれました。主筆及び副社長を歴任した菊竹六鼓とは、どんな人物だったのかを紹介いたします。

六鼓は明治十三年、うきは市吉井町生まれ。2歳の時のケガが原因で生涯歩行が不自由になり、杖が手放せない体となっていました。しかし、明善中学校（明善高校の前身）、東京専門学校（早稲田大学の前身）と進み、明治三十六年、



文化議員連盟会員
小河 誠嗣



菊竹六鼓の肖像

反骨のジャーナリスト

菊竹六鼓

明治13年、昭和12年57歳没

帰郷し、福岡日日新聞社に入社しました。入社後、徐々に頭角をあらわし、論説を書くようになります。その頃から使い始めた六鼓はペンネームです。

明治三十八年六月二十二日付、「理想の死」という論説は読者の反響が大きかったといえます。

これは、十一歳の踏切番の娘、山崎お栄が列車に轢かれかかった通行人を助け、自分は轢かれ死んでしまった事件を述べたものです。時代は日露戦争

の最中。新聞の論説といえば天下国家を論じるものと決まっていた時代に一少女の死をとりあげ、こう執筆しました。「可憐なる一少女お栄を有したることは、永遠にわが福岡県民の誇りなり。広瀬中佐を出さざりしことは決して福岡県民の恥辱にあらず。東郷大将を出さざりしことは決して、福岡県民絶大の恨事にはあらず。しかれども一少女お栄を出したりしことは福岡県民の永遠の誇りなり、名誉なり。」社会を支えるのは英雄ではなく、名もなき市民なのだ、との思いが込められたこの論説が掲載された後、共感の投書が机の上に山積みになっていったそうです。

こうした心情あたたかい話もありますが、菊竹六鼓といえば、やはり五・一五事件の時に毅然と軍部を批判した反骨のジャーナリストとして知られています。

五・一五事件は昭和七年五月十五日、若い軍人たちが首相官邸を襲い、犬養毅首相を暗殺した事件です。この悲報を聞いて論説「首相兇手に斃る」を執筆。軍部の暴走を批判しました。この事件について、中央の大手新聞社はこのようにと速報は伝えましたが、軒並み報道規制を行っており、それ以上触れることはなかったようです。しかし、非を非として、この軍の暴走をどうするべきか7編の社説で論じ続けたのは福日以外になかったといえます。

「新聞記者は社会の木鐸」これは六

鼓の口癖だったといえます。木鐸とは「世人に警告を発し、教え導く人」のことを言うそうです。体が不自由であったことから、兵役を免れ、武器をペンに持ち替えて、軍人や右翼の脅迫が相次ぐ中、決して筋を曲げなかった菊竹六鼓。彼こそ「福岡県民の永遠の誇りなり、名誉なり」です。

参考文献・「淳風六鼓」

うきは市教育委員会



菊竹六鼓記念館




文化議員連盟会員
壹岐 和郎

写真：公益財団法人東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会HPより

2020年東京オリンピックの新たな正式種目の一つに空手があります。その影響もあつてか、以前よりはCMやスポーツ関連のTV番組などで、取り上げられることも多くなつたと感じています。競技内容は、仮想の敵に対する攻防を一連の流れとして組み合わせた演武である「形」と1対1の戦いである「組手」があります。特に日本代表選手などによる、キレの良い迫力満点の動きには感嘆します。

ところで、空手の競技人口は意外に多く、世界で約5,000万人と言われていると聞かれます。この数は野球や柔道を上回るそうです。どのくらいこの国で競技が行われているかと言え、世界空手連盟(WKF)に加盟している国・地域は192となっており、世界中の国・地域で競技されているようです。特にヨーロッパでは盛んで、フランス、スペイン、イタリア、ドイツ、トルコなどは強豪国として知られています。



第1回沖縄空手国際大会実行委員会のHPより

空手には力強く豪壮なイメージが先に浮かびますが、周知のごとく、発祥は「和」と「礼」を重んじる琉球王朝時代の沖縄であることを思えば、単なる格闘技ではないことは容易に想像できます。琉球にはもともと「手」(テイ)という武術があり、中国や東南アジアの国々と交流する中で、中国拳法と融合し空手が誕生したとされています。空手には「空手に先手なし」という教えがあり、「先手非道」を説きます。琉球王朝の歴史や精神性を考えれば頷けます。史実としても、19世紀初め、琉球を訪れたイギリス人が、航海記に「平和を愛する礼儀正しい人々の振る舞いに感動した」と綴り、それを伝え聴いたナポレオンは武器を持たない国があることを驚嘆したとあります。沖縄空手の先人の言葉に「人に打たれず、人打たず、事なきをもととするなり」「長年修行して体得した空手道の技が生涯を通して無駄になれば、空手修行の目的が達せられたと心得よ」とあります。先程の「空手に先手なし」と同



また、中東諸国や東アジアでも競技水準が向上しつつあります。



特別道場 守禮之館 (しゅれいのやかた)

様、なかなか味わい深い言葉です。余談ですが、沖縄県庁には文化観光スポーツ部に空手振興課が設置され、世界に誇る伝統文化として空手振興に取組んでおり、熱の入れようが伝わってきます。

この度は空手を取り上げましたが、武道やスポーツにはそれぞれのルーツがあり、歴史を持っています。また、時を経る中で精神性や競技性も進化していきます。そして、それぞれ固有の文化性を形作っていくのではないかと思います。ルーツや歴史を探りながら汗を流すのも、この時期にあつた楽しみ方だと思います。